

〈草子洗小町〉小考

竹本幹夫

〈草子洗小町〉の現行曲としての起源は新しい。徳川五代將軍綱吉の稀曲愛好により、貞享年間（一六八四—一八八）以前に宝生大夫が舞ったのを皮切りに、観世流がこれに追隨して幕末に至ったが、明治維新以後に下掛三流が次々に現行曲として取り入れた、近代の人氣曲である。『能本作者注文』や『自家伝抄作者付』などの室町後期の作者付に名が見えるので、それ以前に成立した作品である。ただし

前者の世阿弥作、後者の観阿弥作という説はもちろん信じがたく、時代は応仁の乱の前か後かははっきりしないが、それを大きく遡るものではあるまい。現代でも流儀間で曲名が「草子洗小町(観)」「草紙洗小町(春・喜)」「草紙洗(宝・剛)」と一定しないが、これらが元々の決まりであったわけではなく、「双紙洗」などとも書いた。本曲の場合、曲名の流動はそのまま作品内容の未熟とも一体で、本曲には諸流一致して原本の誤写・誤記と思しい文句が存在する。「未熟」というのは、内容が稚拙であるという意味ではなく、諸流謡本の祖本に、定本と呼べるほどの素性の良い完成された本を想定出来ないという意味である。その

ような中で、一九六三年刊行の岩波日本古典文学大系『謡曲集』下巻の表章氏の頭注は素晴らしい内容で、その後に注釈が出ていないためもあるが、今なお本曲解説に必須の文献である。その卓説に導かれて、本曲の「未熟なゆえんを見ることにしよう。

例えば、全役が登場して謡う第2段の「サシ」の「救世の闡提」は観世流が独自に正した詞章で、他流は「だいせん」であり、もちろん「闡提」が正しい。それに続く「製を路世に弘め」の「路世」は「世路」（世間の意）の誤りだろうとされる。第5段のワキ黒主の言葉「富士のなるさの大将」は正しくは「富士のなるさの入道」とあるべきで、鳴沢を「なるさ」と誤った俊成入道を嘲った故事の誤伝である。これは同じく歌人の失錯の例として『無名抄』で対にされている、藤原実定が無明の酒を「名もなき酒」と誤読して渾名された「名なしの大将」と縮合して一つにしたかとされるが、そうではあるまい。第6段の末で草子を洗わせて欲しいと懇願するシテ小町を諷めたツレ貫之が、すぐすと立ち去る小町に第7段の冒頭で改めて声をかけ、帝に草子洗いを提案し

ようと呼び止めるのも、能には類似の趣向が少なくないものの、前段の「もし又さなきものならば、襖ふすまに衣の風情たるべし」という貫之の語調の厳しさからは、同一人の行動として釈然としない。一言も発しない凡河内躬恒などのセリフだったのが、役名表記がなくて貫之に宛がわれた可能性があるのではなからうか。

これらの他にも、本曲には出典のはっきりしない引用や、厳密な意味不明の言葉が少なくない。さらにもう一つ例を挙げれば、草子洗いの段である第8段の「ロンギ」で、「恋の歌の文字なれば、忍び草の墨消え、涙は袖に降りくれて」を、「恋歌を洗うと、人目を忍ぶ恋の思いを詠んだ、文字もかすかな忍び草の歌がまず消え……」と現代語訳される。しかしながら、黒主の加筆部分でもない恋の歌が水に流されて消えてしまっただけは、まずいのはなからうか。ここは、「恋歌の文字を洗っている」と人目を忍ぶ恋ではないが、屈辱を耐え忍ぶ悔しさに自らの眉墨も涙で消え、さらに涙は袖に頻りに降りかかる」とでも訳さないと意味が通じないのだが、ここはあくまでも草子の文字のことが謡われているので、このように訳すのはかなり無理なのである。この例などは、誤記が紛れ込んでいてというよりは、作者の筆力に瑕疵があると見た方がよい。こうした諸々の問題に気付いたためであろうか、明和改正謡本の刊者観世大夫元章は、明和外組本に本曲を収録するに際し、かなり

大規模な詞章の改変を施している。先の貫之の取りなしの場面も、小町の涙で黒主が万葉歌だと主張した歌の墨がにじんでいるのに不審した帝が、貫之に命じて小町に草子を洗わせるという段取りになっている。このようではあっても主要登場人物である、小町・黒主・貫之・帝という配役には変更を加えていない。これはこの配役には問題がないと元章が考えていたためであろう。そして確かにこの配役には、問題がないのである。

現代の多くの解説書では、この配役には作者の無知・無教養が露呈しているとす。しかし果たしてそうであろうか。『古今集』の撰者である紀貫之や凡河内躬恒、壬生忠岑と、その序に紹介される六歌仙の、小野小町・大友黒主が同時代人であると誤認するほどの無教養な作者が、このような作品を書けるであろうか。むしろ『古今集』撰者の内ながら早世した紀友則が登場していないところなどは、中々心憎い配置だし、草子洗いの段では、『万葉集』に部立てがあるようなおかしな詞章ながら、古今の詩歌を縦横に組み合わせた作詞をしており、元のテキストが権威のない本であったためか、不審点は多々あるものの、中々の教養の持主と認められるのが、〈草子洗小町〉の作者なのである。すなわちこの作者は、登場人物が時代を異にする事実を知っていないが、意図的にこのような作品を作ったのである。つまり、『古今集』撰者という権威を判者として、帝の前で小町と黒主とが和歌の道

を賭けて対決する、という趣向を目指したのであろう。

和歌の道といっても、たんに歌を番えるだけでは面白くないから、黒主の謀略により、小町に剽窃の冤罪を仕組むという形を取ったのだろう。現代の〈草子洗小町〉は、謡も舞も面白く作られているので、ついそちらに興味が集まってしまうが、実は元々は筋で見せるという趣向も存在していたのではなからうか。現実無視の奇想天外な趣向ながら、それを楽しむ観客に期待して、作ったのであろう。ただしあまり受けなかったものか、室町時代には上演・演出に関する記録がなく、曲名が現れるのは、謡本も含め、近世以後である。

史実にこだわらずに劇を楽しむという発想は、古い体質の演劇には存在しない。古典的な劇というのは、その世界が事実に基づいているという点に強いこだわりがある。世阿弥が「本説正しき能」をよしとして、「本説」すなわち作品の典拠を名作の必須条件としたのも、このこだわりの故である。なぜなら、作品世界の事実性こそが、作品と作者とをつなぐ、共同幻想の核になるものだからである。これは作品と観客とが、同じ情報・知識を共有しているということに他ならない。

これに対し〈草子洗小町〉は、そのような古典的な共同幻想を平然と裏切るのである。これを見た「本説正しき能」に狎れた観客は度肝を抜かれ、作者の無知蒙昧と即断するのであるが、実はこの点で〈草子洗小町〉はきわめて

新しい演劇だったのではなからうか。歌舞伎以降、現代に至までの演劇は、常にこのような形で「事実」を変形利用するからである。〈草子洗小町〉が目指したのもそういう作品世界であり、その中で人間を描こうという志を持ったのであろう。悪事が露見して自害を図ろうとする黒主に対し、「この身みな以つてその名ひとりに残るならば、何かは和歌の友ならん」という名利に対する恬淡とした姿勢を示し、「道を嗜む志、誰も斯うこそあるべし」と求道の貴さを繰り返し賞賛させ権威付けるのは、大団円に導く理屈のようではあるが、むしろそこに人間のあり方に対する作者の思いを見るときではなからうか。

こういう作品は、恐らく中世後期の日本においては理解者を得がたかったであろうし、また些事にこだわらない作詞の舌足らず感と相俟って、〈草子洗小町〉を廃曲化させたのであろう。それを復活させたのが、歴代將軍きつての学問好きで能狂の徳川綱吉であったというのも、専制君主ながらある種の眼を持った人物であったことを思わせ、興味深い。

ちなみに本曲には金春・道成寺、観世・楡垣、金剛・住吉詣と並ぶ、宝生流の乱拍子上演曲であるとの伝承が、江戸時代初期から存在するが、その根拠は不明で、〈道成寺〉以外に乱拍子が本来演出であったかどうかの確証がない。恐らくは金春家の乱拍子秘伝の影響下に発案されたものではなからうか。

(早稲田大学名誉教授)